

新日本出版社

文／学の泉

読み手の芸術論

北條元

北條 元一（ほうじょう もとかず）

1912年 京都市で生まれる

1936年 東京大学文学部卒

世界文学会会員，日本独文学会会員，日本民主主義文学同盟員
東京工業大学，名古屋工業大学，日本福祉大学各教授をへて現
在東京都立大学講師

主な著書 『芸術認識論』（北隆館）『民主主義芸術論』（彰考書院）
『ハムレット論』（白揚社）『芸術とは何か』（造形社）『文学・芸
術とリアリズムをめぐる』（青磁社）など

文学の泉へ——読み手の芸術論

1989年5月20日 初版©

著者 北 條 元 一
発行者 山 本 功

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-6
発行所 株式会社 新日本出版社

電 話 東京 (423) 8402 (営業)
(423) 9323 (編集)

振替番号 東京 3-1 3 6 8 1

印刷 壮光舎印刷 製本 小高製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布する
ことは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利
の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01730-5 C0090

文学の泉へ

目次

まえおき……………7

第一章 現実世界から作品世界へ……………9

- 1 芸術受用の特殊性
- 2 作者（視点）の消失

第二章 作品世界への没入……………24

- 1 現前としての感受
- 2 非現実の感受
- 3 現実との混同（二）だまし画など

第三章 没入による現実との絶縁……………40

- 1 忘我による没入、夢とのちがひ
- 2 現実との混同（二）のめり込み
- 3 私情からの解放

第四章 高見の見物と身につまされる……………57

- 1 傍観者としての好奇心
- 2 好奇心から親近感へ

第五章 没入の受動性……………73

- 1 作品の見せるものだけを見る
- 2 まさにそうある、と受け取る

3 お膳立てどおりに見る

第六章

没入から同化へ……………89

- 1 感情移入的同化
- 2 憐れみ、怖れ、笑いと同化
- 3 人物への同化とその意味

第七章

想像力による同化の克服……………105

- 1 同化は真の味解か
- 2 受動から能動へ

第八章

想像による作品世界の探究……………121

- 1 想像・仮経験・空想
- 2 真実を求める想像

第九章

受身の見聞から責任ある目撃へ……………137

- 1 筋展開の予想とその根拠の把握
- 2 目撃者の責任
- 3 経験と体験

第十章

当事者への転身……………154

- 1 立会人と当事者
- 2 作中人物への転身

第十一章

転身はいかにして可能か……………170

1 作家の人物創造 2 ひとつはあらゆる性質の萌芽をもつ

3 行為の撰択と人間形成 4 他人への洞察

第十二章

作中人物の行動と責任……………188

1 作中人物に行動の自由はあるか 2 作者は人物を自由に動かせるか

3 作品世界の法則

第十三章

受用者の責任と作品の私物化……………205

1 転身した受用者に自由はあるか 2 動機の究明 3 社会的

根拠の解明

あとがき……………223

引用作品名索引……………巻末

文学の泉へ——読み手の芸術論

刊行を待たずに逝つた
妻さなえに
この本を贈る

まえおき

文学作品は、近代社会、特に印刷術の発明以来、急速に社会生活に浸透し、その不可欠な要素となつて大きな役割をはたしてき、十九世紀の中頃から社会のあらゆる階層にも普及するようになってきた。もつとも二十世紀に入つてからは映画、テレビなどの映像芸術や劇画などがめざましくその勢力を伸ばしつつあるとはいへ、文学作品の影響力は、かつてより衰えているなどとはいえないばかりか、その持続性や強度においては、かえつてそれらをしのいでいるといつていいであらう。

今日、文学作品に全くなかかわりを持たない人間など、おそらくいないといつてよからうが、われわれは文学にもつばら読者として接するのであつて、作品をつくるのは依然として専門家たる作家などごく少数部分にすぎない。文学は主として受用すなわち読まれなどすることによつて社会生活の中に大きな地歩を占めているのである。そうとすれば、その受用のあり方が重要となる。しかし、近来、受容美学などによつて、その意義が重視されるようになってきたとはいへ、まだまだこうした点の考察は不十分であるように思われる。それゆへ、これから文学作品の受用の側面について、つねづね考へてきたところを随想風にのべて、ひろく検討の具に供したいと思う。

第一章 現実世界から作品世界へ

1 芸術受用の特殊性

まえおきで受容といわずに受用という言葉を用いたが、そのことについて説明しておきたい。机でも椅子でも、冷蔵庫でも洗濯機でも何でもいいが、こうした実用品（物質的生産物）は使用のためにつかわれる。ところが新聞や書籍や映画などは読むため見るためにつくられる、観念伝達のための表現物（観念的生産物）なのだから、使用と区別して受用という。受容でなく受用というのは、平安朝貴族などの恋歌にしても、相手が読む場合、後世の人が文学として味わう場合、歴史家が資料として扱う場合それぞれ読み方が、用い方によってちがってくると思うからである。

文学作品は大抵は、芸術としてわかり、かつ味わう（論文の受用たる理解と区別して味解とよぼう）ためにつくられたものであり特殊な受用の仕方を要求している。私信のように個人にあてられたものでなく、原則としては社会において公衆（Publikum）に対して公表されたものである。もつとも宮沢賢治の大多数の作品のように未完成のまま発表に至らなかつたもの、生前認められなかつた作家の埋もれた作品もあるかもしれない。しかし、未発表作品といえども原稿用紙などに書きしるされ

て、芸術として味わいうるものならば、公表されうる可能性はもっている。それに反して脳中にいくら壮大な構想をもち細部まで仕上げられているとしても、表現され書きしるされていなければ作家の死とともにほろび芸術としては永久に存在することはできない。

同じように観念を相手に伝え、受用を目的としたものでも、社会に公表される報道や論文もあれば、手紙のように特定の相手に宛てられたものもある。これらと芸術作品の受用たる味解はいつたどのように違うのか。それをこれから少し考えてみたい。

まず手紙について。ふつう手紙はその宛てた特定の相手に、それに対する一定の対応を期待し要求している。税金の督促、借金の催促状、会合への招待状にとどまらず、転居、結婚、死亡通知状なども、それぞれの対応を、たとえば転居先へ今後は連絡してくれなどの措置を期待しているのである。相手はそれに対し返事などの対応（返事をしないのも対応のひとつである）を考慮しながら文面を読まなければならぬ。私信は公表されないのが普通だが、何らかの事情で公表されるなりして相手以外の人を読む場合は、対応を考慮する必要はないわけだから、読み方、うけとり方は必ずから別様となる。読書会などでよく取り上げられ感動をよぶ宮本顕治・百合子の「十二年の手紙」にしても、もともと公表を予期しない私信であり、相手個人への知らせ、励まし、差入れの頼みや答えなどを含んでいる。この場合でも当事者と検閲官などの読み方には雲泥の差があるうし、いま公刊されているこれらの手紙を読むわれわれは（人によって差はあるうが）、直接には現実に対応する必要がないわけだから、その読み方は大変にちがうだろう。とはいっても、この手紙集は、現実の顕治・百合子の往復書簡として感動をさそうので、小説「播州平野」などがおこす感動とは次元がちがうと言わなければならない。

ところでモンテスキューの「ペルシャ人の手紙」(一七二二年)のような書簡文学は、手紙の筆者たるペルシャ人ウズベクが、作者の家に泊っていて、作者がそれを見せてもらい書き写した、という体裁はとつているものの、われわれはこの書簡を当時のフランスの専制政治、社会に対する警拔な批判をふくんだ諷刺文学として味解するので、ウズベクが架空の人間であろうと一向にかまわない。

恋文などは当事者同士の親展であることが多いだろうが、後年公刊されることも稀ではない。谷崎潤一郎が後に夫人となる松子に送った崇めんばかりの恋心を綴った数々の手紙とか小林多喜二の田口瀧子宛のいたわりにみちた恋文などもそうである。それらをわれわれが読むときは、もちろん当の相手の松子や瀧子とちがつて何の現実的対応も不要だから、当然その読み方はちがつてはくるだろうが、その場合でも、われわれは現実の潤一郎や多喜二の書いた実際の手紙として強く興味をひかれるので、「盲目物語」や「瀧子其他」を読むときの感興とは自ずからことなっている。ルソーの書簡文学「ジュリー」もしくは新エロイズ」の場合、家庭教師サン・ブルーが教え子たる男爵令嬢ジュリーにあてた数々の恋文やジュリーの返信などは、ルソー自身序文で、みなつくりごとで、ジュリーらはすべて虚構の人物だと断っているし、それらは文学として数々の人たちに強い感動をあたえたのであった。ダンテが今はなきベアトリーチェへの切ない愛情を数々のソネットをまじえて書き綴った「新生」なども、「神曲」の詩人ダンテの現実の人ベアトリーチェへの実際の想いであるか、どうか、を全く知らなくても芸術として味解できる。

信者などのための經典類はどうか。旧新約聖書をキリスト教徒が信仰のために読むのと、ひとが一種の文学的物語として読むのと同じだといえるだろうか。私が小学三年で母を亡くしたとき、仏壇に向かつて唱えさせられたお経は漢訳ふりがなつきで内容など全くチャンパンカンパンだったが、供養と

してはそれでいいのであろう。葬儀の際に僧侶があげる経文は今でもおおむね漢文で参列者の殆どには意味不明にちがいないが、信者は大抵有難がつて聞く。信仰対象と芸術作品のちがいはつきり示すのは神像や仏像である。ギリシャ古代の神像はオリュンポス多神教の亡んだ後も立派に芸術として味わわれている。飛鳥時代の代表作たる奈良、中宮寺のあの優美きわまりない本尊の弥勒菩薩半跏思惟像（寺伝では如意輪観音）にしても、有難がつて拝む場合と、芸術作品として嘆賞する場合は、その眺め方が全くちがうのは、鯛の頭も信心からといった諺からみても明らかであろう。芸術作品としてならば、ひとはこの半跏思惟像に、信仰の対象には全くなりえないロダンの「考える人」などと本質的には同じ受用態度で接する。もちろん本尊を礼拝する敬虔な篤信者の有難がる気持の中に芸術的嘆賞が融合し混入することがないなどというのではない。ただ、中間的なものがあるとしても両者には本質的なちがいがあるのである。

手紙のように特定の宛先をもつわけでもなく、經典のように信者向けでもなく、ひろく一般に訴えかけるものとして、たとえば「核兵器全面禁止・廃絶のために ヒロシマ・ナガサキからのアピール」などがある。これは人類一般に核戦争の危険を訴え「全人類の死活にかかわる最も重要かつ緊急のものとして」核兵器廃絶のための署名を求めている。ひとはこれを読むとき、ただ内容を理解したり、そうした運動が行なわれていることを知るただけでなく、署名するか、否かをきめるための現実の対応を考えた読み方をせざるをえない。しかし、このアピールは核兵器全面禁止のためなのだから、核軍拡競争になやむ現代人に向けられているのであり、幸い、近い将来この禁止が実現したならばこの文書はその意義を終え、単に歴史的資料と化すであらう。

新聞のニュース、報道などはどうか。これも一般に公開されているとはいえ、伝えるべき相手は、

まさにその時点における人々に限定されているのであって、一ヶ月後、一年後、数年、数十年後の読者を予想してゐるのではない。数日もしくは数ヶ月後にはそれらはニュースとしての生命を全く失ひ、ほんの一部が切抜かれ記録や資料として保存される以外は屑紙となつて廃棄されてしまふ。読む側は単なる好奇心でなく、今日自分を取り囲む環境、情況に対し正しい知識を以て対応できるように読むのである。好奇心から読む場合でも自分の生きてゐる世界をよりよく知りたい意向によるので、面白くありさえすればでつちあげでも嘘つぱちでもいいと思つて読むわけではない。遠いニカラグアの情勢の推移さえ、われわれと多少とも實際に関係するものとして期待や危惧を抱きながら読む。誰にも實際的関係のない事件はニュースとして新聞に掲載されはしないだろう。われわれが新聞を報道として読む場合は、それが誤報であつたり、悪質なデマであつたり、事實の取捨選択、省略などによる眞実の誤認への誘導でもありうるにもかかわらず、それらが事實および眞実として報道されているために、そのまま受け取ることが多いであらう。それゆゑ、われわれには報道をつねに鵜呑みにせず、事實かどうか、眞実を伝えているかを吟味し、判別し、批判的に読む心掛けが必要となつてくる。

それでは過去の記録や歴史的記述などはどうか。過去は、われわれの現在の現実の生活をつくり出してきた地盤なのであり、その記録は、われわれが未来へとつき進むための手助けとなるものであるから、単に前車の轍をふまぬようといった意味にとどまらず、歴史から教訓を学びうるのである。もちろん、歴史を知り、そこから学ぼうとしなくても、ロシアの十月社会主義革命はいうに及ばず、遙か遠い古代ギリシヤのペルシヤ侵略軍撃退すら、現代のわれわれがそれについて知る知らないにかかわらず、現実世界に大きい影響を及ぼしてゐるのは確かである。ところでロシア革命を（第一次大戦から内乱の終息までを）革命・反革命の間を動揺するコサック、グレゴリーを主人公として壮大な規

模で描いたシヨロホフの「静かなドン」にしても、古代ギリシャの三大悲劇詩人の先頭をきるアイスキュロスが、自ら参戦し大勝利を博したサラミス海戦を、辛うじて逃げ帰ったクセルクセス王をはじめとするペルシャ人の側から侵略者の悲劇として描いた「ペルシャ人たち」にしても、それを読まな限りわれわれに影響を及ぼすことはない。

それはさておき、ここでは過去の記録として、たとえば旅行記をあげてみよう。それらは具体的であるという点で文学作品に似ており、それゆえシラノ・ド・ベルジュラックの「月世界旅行記」やスウィフトの「ガリヴァー旅行記」のような旅行文学さえかなりある。しかし、実際の旅行記、たとえば一八五八年刊のゴンチャロフの「パルラダ号巡航記」——その中、日本関係の分、全体の約三分の一の訳が「日本渡航記」として岩波文庫から戦前に出て、当時、日本の幕末の様子が実に生々と描かれていたので愛読したものだ——はあの有名な「オプローモフ」などの作者ゴンチャロフが実際に幕末に通商条約締結のために帝政ロシアから来日したプチャーチン提督の秘書として随行した実際の見聞記であるからこそ、貴重なのであり、読んで興味津々なのである（もちろん、これを文学として読むことも可能だが）。ところが「ガリヴァー旅行記」などはどうか。この本のはしがきでは出版者シンプソンなる人物が、ガリヴァー氏は私の親友であり親戚であると称し、真実味は全篇にみながっていると言しようとも、読者は「リリパット（小人）国」の存在など徹塵も信じていないのであり、記録としてならこれなど三文の価値もないので、やはり文学として味解するほかはない。

今までのべたところから、手紙や記録、旅行記などが文学作品として読まれる場合は、それらが実際の手紙であり、事実の記録であるとしても、それが事実か否かは作品の受用、味解にとつては本質的な重要さを持たないことが明らかになったと思う。ことわっておくが、これはもっぱら事実か否か